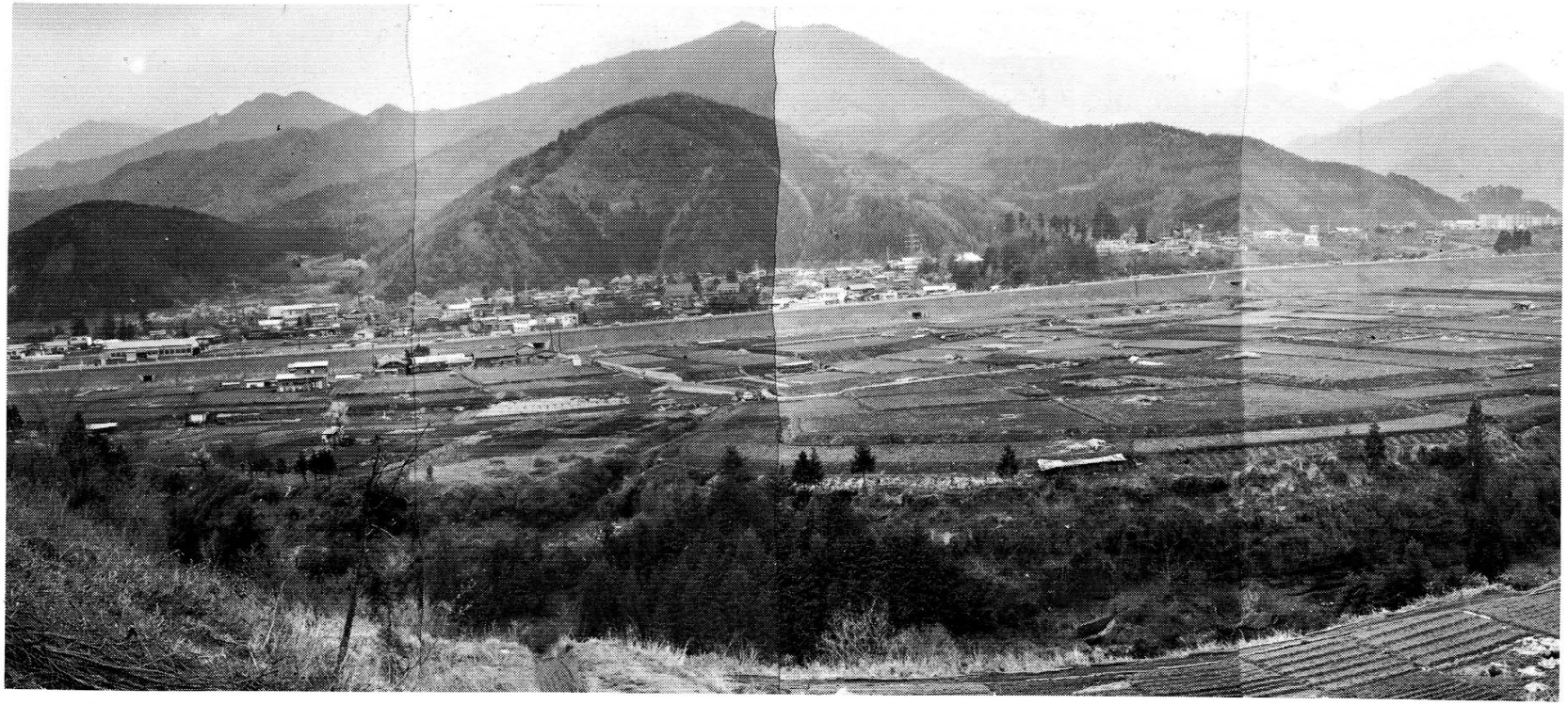
山梨県都留市十日市場

馬ヶ舟遺跡

都留市発掘調査報告書

都留市教育委員会

1976. 9



馬々舟遺跡遠景

はじめに

文化の発展の名のもとに、私達は逆に今までの文化を傷付け、また、環境を破壊しながら現代の文化を築こうとしてきました。現代の文化をつくりあげていくのに過去の文化を抹消しながら進んでいくのではなく、私達の祖先の文化を尊重し、保存し、記録にとどめて、後世に文化財を引継いでいかねばなりません。

都留市内には多くの縄文時代の遺跡が存在していると考えられ、遺跡が破壊されないよう努力するとともにもし破壊される場合には発掘調査をおこない、その内容を記録にとどめてきました。

このたび発掘調査をおこなった馬々舟遺跡は桂川と柄杓流川との間の河岸段丘に位置しており、縄文中期の向原遺跡が隣接しているなど縄文人にはかつ好の土地であると想像されます。今回の発掘調査によって当市の先史時代の空白部分である縄文前期から中期初頭にかけての文化にひとつの重要な資料が得られたことはまことによろこばしい次第であります。

この報告書がひろく活用され、この地の縄文文化を知る手がかりとなれば幸いです。

おわりに、この発掘調査と報告書の発行にあたっては、馬々舟遺跡発掘調査会を中心に都留市文化財審議会、都留文科大学考古学研究会のみなさんや多くの方々の協力と努力によって行なわれたものであり厚く感謝の意を表します。

昭和51年9月1日

都留市教育委員会

目　　次

はじめに

1. 経　　過 …… 1

2. 遺跡の環境 …… 2

3. 発掘の経過（発掘日誌） …… 3

4. 層　　位 …… 6

5. 出土遺物 …… 6

　(A) 土　　器 …… 6

　(B) 石　　器 …… 7

6. まとめ …… 19

7 調査会の構成 …… 19

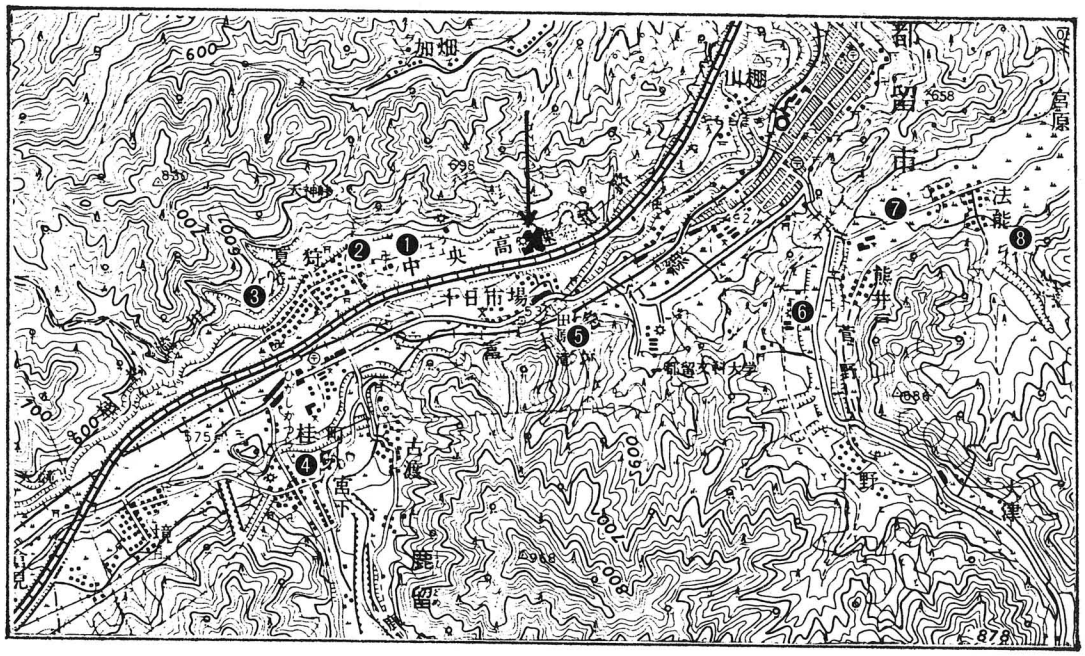
1. 経　　過

都留市には現在58ケ所の遺跡および遺物撒布地が知られているが急速なる宅地の造成、工場の新設、道路の拡巾、大型農道の整備と一日として休む事なく地形は変化をとげ、調査の衝にあたる者としては一日として安閑としていることは出来ない。馬々舟遺跡は古く羽田一成氏により指摘された遺跡であるが、隣接の向原、上ッ原、おいしかね遺跡からは現在でも遺物の表採が可能であるが、馬々舟遺跡については、表土の堆積が厚いためか遺物の表採は出来ず地名のみが遺跡として知られていたのみであった。

昭和49年10月団体営農道整備事業十日市場農道第造工事として遺跡のある所謂向原台地に大型農道が3ケ年計画で貫通することになり、最初に馬々舟遺跡を通過することが判明したので、急遽発掘調査会を編成、都留文科大学考古学研究会に調査を委託、緊急発掘したものである。

発掘の結果遺構の発見はみることが出来なかったが、当市の縄文時代の空白部を埋める諸磯C期および十三坊台、五領台の貴重な資料を得られたことは大きな収獲であった。

耕地の発掘を快諾された斉藤博忠氏、発掘調査期間中ご理解とご協力を賜った公私多数の各位に深く感謝する次第である。



第1図　馬場舟遺跡(×印)と付近の遺跡(○印)　$\frac{1}{50,000}$

1. おいしかね遺跡
2. 御所海戸遺跡
3. 高子遺跡
4. 久保海戸遺跡
5. 大堰遺跡
6. 十二海戸遺跡
7. 住吉遺跡
8. 天神山遺跡

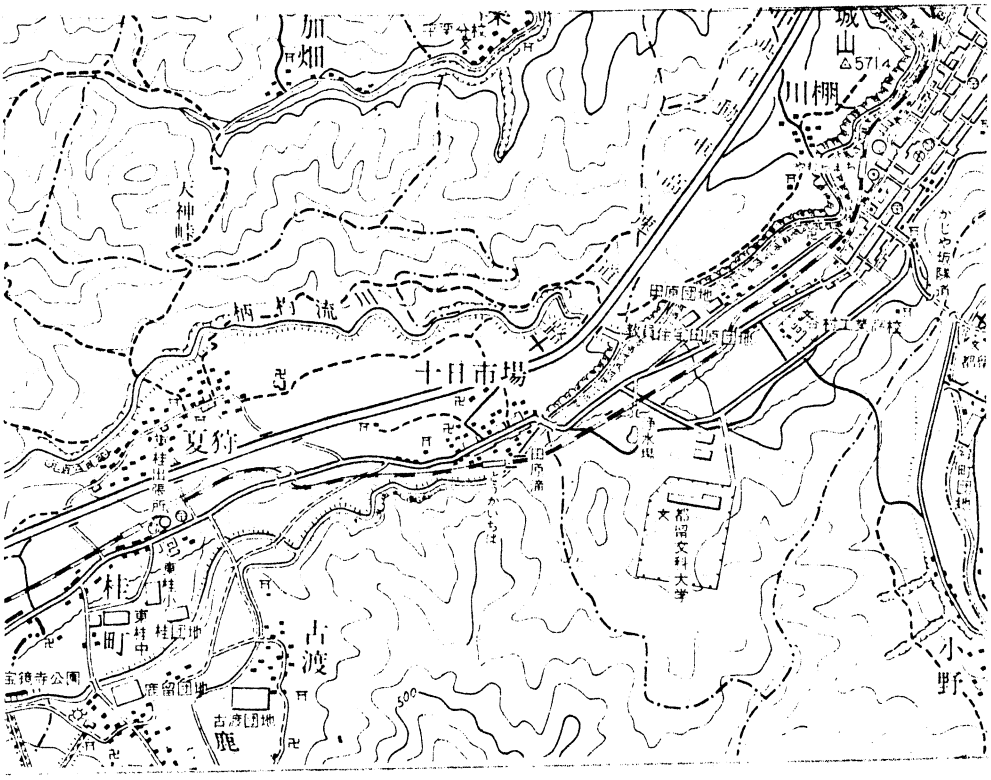
2. 遺跡の環境

馬々舟遺跡は都留市東桂十日市場地区にある。富士急行線十日市場駅から中央自動車道のガードをくぐり北方約600ｍの処に位置する。

都留市内の遺跡の殆んどが市内を流れる桂川と之に合流する支流の構成する河岸段丘上に立置するが馬々舟遺跡も亦東桂地区を流れる桂川と三ツ峠の山中に端を発し、遺跡の北側の山裾を流れ十日市場地区で桂川に合流する柄子流川の構成する河岸段丘（向原台地）上に立地している。

所謂向原台地は東西に約1Km伸びる台地で南に向って次第に傾斜を増している。

遺跡は柄子流川岸より南方100ｍ、桂川との合流点より西方400ｍの地点で正確な地番は都留市十日市場327－1番地である。現在台地は東西に走る中央高速自動車道により二分された形となっているが、昭和39年道路建設に伴う事前の発掘調査により「山梨」、および「マルビ」の遺跡が発掘調査され、その結果については「発掘調査に基づく発掘調査報告書」に詳しいが、前者からは縄文後期の堀之内工式に近いものが、後者からは縄文前期の諸磯Ｂの出土を伝えている。隣接する遺跡としては向原、おいしかね（縄文前期末）下ッ原（縄文中期）が知られているが発掘調査は一度も行なはれたことがないので詳細は不明である。



第2図　地　形　図

1
30,000

3. 発掘経過（発掘日誌）

従来耕地として使用されていた畑地なので、発掘は比較的容易であった。併し春とは云え台地を吹きぬける寒い北風と小雨、小雪になやまされ、発掘の手を休めることもしばしばであった。

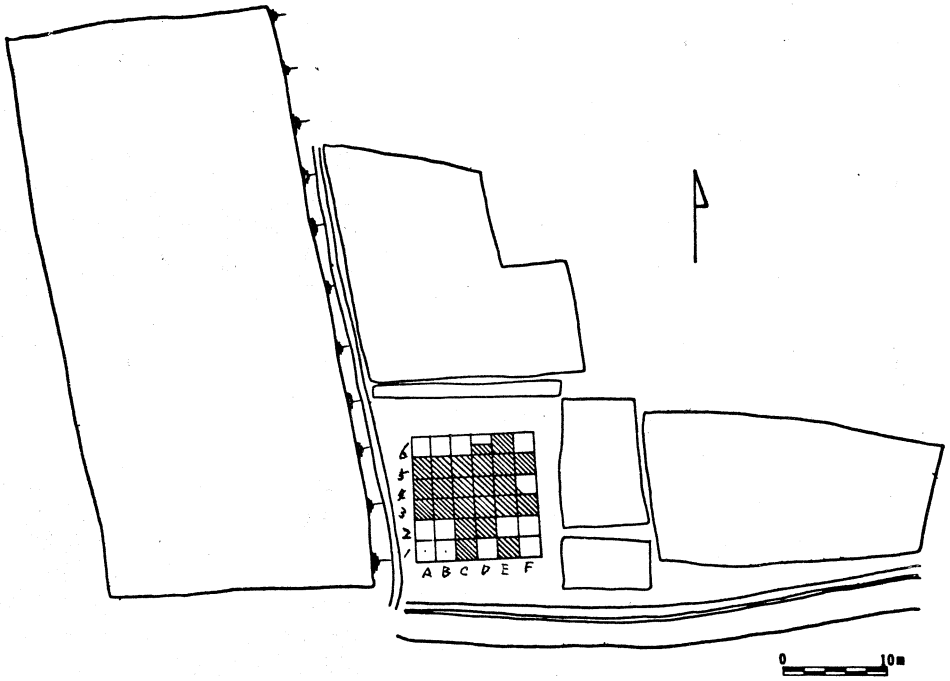
又発掘は比較的容易であったとは云うものの、市内の従来の発掘と同様表土の堆積が厚くロームまで1.70m～2.0mあった。

発掘の結果遺構の発見は出来なかったが、従来市内で未発見の諸磯Cの完形土器1、其の他十三坊台、五領ケ台の良好な資料を得又火山灰層の存在が認められ、当地に於ける富士火山活動と遺跡に関する資料を追加し得たことは貴重な収獲であった。以下発掘日誌をもって発掘経過にかえる。

3月24日(月)　小雨

9時30分文大前に集合、器材を運びながら現地に向う。小雨に混って雪が降って来るが、調査を開始する。

南北方向に12m×12m の区画を設定、その内部に2m×2mのグリット36ケ 設定する。グリットには南から北へ1～6、西から東へA～Fの記号で命名した。地形測量の後に、A・3、A・5、B・4、C－1、C－3、C－5、D－2、D－4、E・1、E・5 の合計10ケ の表土剝ぎの作業にとりかゝる。



第3図　発　　堀　　区

表土、火山灰層、黒色土層、ロームと層をなしていることを確認する。遺物包含層は火山灰層と黒色土層上部と思われる。D－4 グリッドを中心に土器片、黒曜石片が採取された。

3月25日(火)　曇

朝のうち小雨がばらつき、地表には霜柱がみられる。9時作業開始。

全面発掘をするために新たにE－3、F－5の2ケのグリッドを発掘する。D－2 グリッド黒色土層上部より磨製石斧が、E－3 グリッド黒色土層上部より打製石斧が出土し、他に火山灰層の下部より口縁部などの土器片が出土した。

3月26日(水)　曇

連日北風が強く寒い日が続く、時々小雨がちらつく。9時半作業開始。

午前中、東西セクションをA－3→B・4→C・3→D・4→E・3のグリットから、南北セクションをC－5→D・4→C－3→D・2→C－1 のグリットからセクション図をとる。

発掘地の南側A・1、A－2～E・1、E－2 グリットのあたりは火山灰粒が大きい。そして黒色土層に火山灰のブロックがみられる。C－1グリット黒色土層上部から打製石斧が出土。

3月27日(木)　晴

久し振り晴。9時半作業開始。遺跡が確認されないので、既にロームまで掘り下げたグリッドを埋め戻しつつ新らたにB－3、C－2、C－4、D－1、D－3、D－5、E－2、E－4、E－6、F－6、F－4 の合計10ケのグリットの発掘に着手する。火山灰層には黒色と褐色とが混在している。黒色土層上部にはスコリアを見られる。L 2 グリット火山灰層

より黒曜石塊を出土する。出土土器片の文様形態から縄文前期末葉の遺跡と考えられる。

3月28日(金)　晴

9時半作業開始。昨日の作業を続行する。火山灰層の所々に表土からの落ちこみがみられるが遺構との関係は認められない。

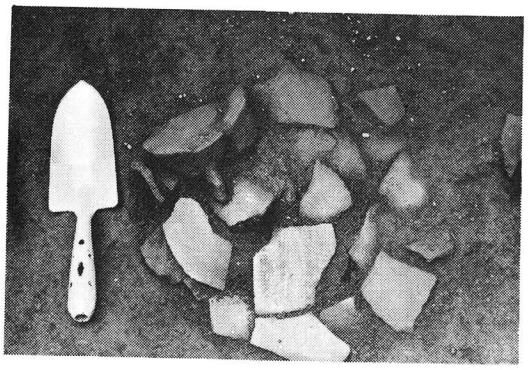
E−4 グリット黒色土層上部より二次加工された石匙を発見。B−3 グリッド火山灰層より打製石斧、D−3 グリット黒色土層上部より打製石斧をそれぞれ出土、D−1 グリッド黒色土層上部より把手型土器が出土した。

3月29日(土)　晴

発掘最終日、午前中は風もなく暖かかったが昼から風が強くなりまた寒い日となった。

9時作業開始。D−1 グリッドよりほぼ完形の土器出土、E−2 グリッド火山灰層からも源形を想定し得る土器片など多数の土器片が出土した。

D−1、E−2 グリッドを含め埋め戻しを開始、夕方までに全ての埋戻し作業を完了した。



3月30日(日)　晴

空は晴れているが朝から風が強くあいかわらず寒い。昨日埋戻しを完了したので今日はテントの片付け器材の運搬を行い午前中に終了し発掘調査は完了した。

4. 層　位

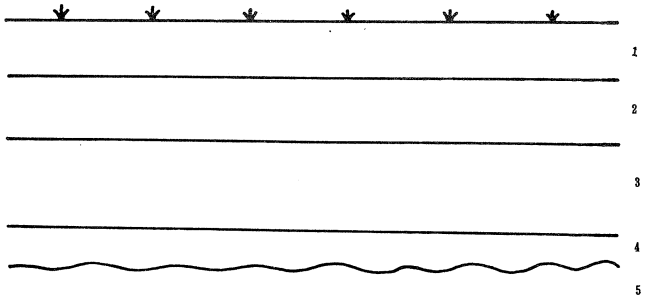
層序は、大きく四層に分かれ、下層より、ハードローム層、ソフトローム層、黒色土層、火山灰層、表土の順で堆積されていた。

表土は、地面から60Cm ほどの深さをなしている。ここは、現在畑作が行なわれているため、攪乱されていて発掘作業開始前に若干の遺物を表採することが出来た。

火山灰層は、深さ60〜100mm ほど堆積しており、黒色と褐色との2層がみられたが、これらは混在しており、完全な層序をなしていなかった。この火山灰層には所々に、表土からの落ち込みがみられたが、今回の調査では、遺構は発見されなかった。また南側のグリッド(A〜F)−1(A〜F)−2あたりの火山灰層は、その粒子が比較的大きかった。

火山灰層の下は、黒色土が深さ100〜140Cm ほど堆積しており、この層の上部には、スコリアが多くみられた。また火山灰のブロックも多数みられた。

遺物は第2層、第3層それぞれから出土したが復元可能と思われり土器片や、打製石斧、磨製石斧を含め、ほとんどの遺物は、この第二層の火山灰層の下部と第三層の黒色土層の上部とを、包含層として出土した。



第4図　地層模式図

1. 表　　土
2. 火山灰層
3. 黒色土層
4. ソフトローム
5. ハードローム

5. 出土遺物

A 土　　器

第1類土器

1は複雑な縄文がほどこされ、繊維を含んでおり、黒浜式土器に比定される。当遺跡ではこの形態の土器はこれ一つだけであった。

2，3は大粒の粗い縄文が地文であり、そのうえから沈線がほどこされている。これらは諸磯b式土器に比定される。焼成は良好である。

第2類土器

この遺跡の出土土器の大部分を占めるのが第2類の土器である。これらのうち多くのものは焼成が非常に良好である。4〜77は平行沈線分(集合状線分、斜交文、弧線文など)に、ボタン状突起文あるいは紐状突起文があるのが特徴である。また、10と78〜101は結節状沈線文が配されて

いる。

102、103 は結節状浮線文である。これらの土器は広義の意味で諸磯C式土器に比定されると思はれる。

第3類土器

第三類土器は幾何学的な図形を示す平行沈線文連続Y字状文、三角陰刻文が主な特徴となっている。104〜118 までの土器が第三類の土器である。

107〜113、116 の縄文は縄端に結節が作られ、これらの場合、全てが縦に回転して施文土されている。

114〜115 は平行沈線が幾何学的な図形を描いており、117、118 は三角陰刻文がみられる。これら第三類の土器は十三菩提式、五領ケ台式土器に比定されるであろう。

B 石　　器

馬々舟遺跡から出土した石器は、計5個でありそのほとんどは欠損品である。

各々については次の通りである。

I 打製石斧

1と2は不整であるが短冊型であり、石質は粘板岩である。3は破損部が多いため型は推測し難い。石質は砂岩である。

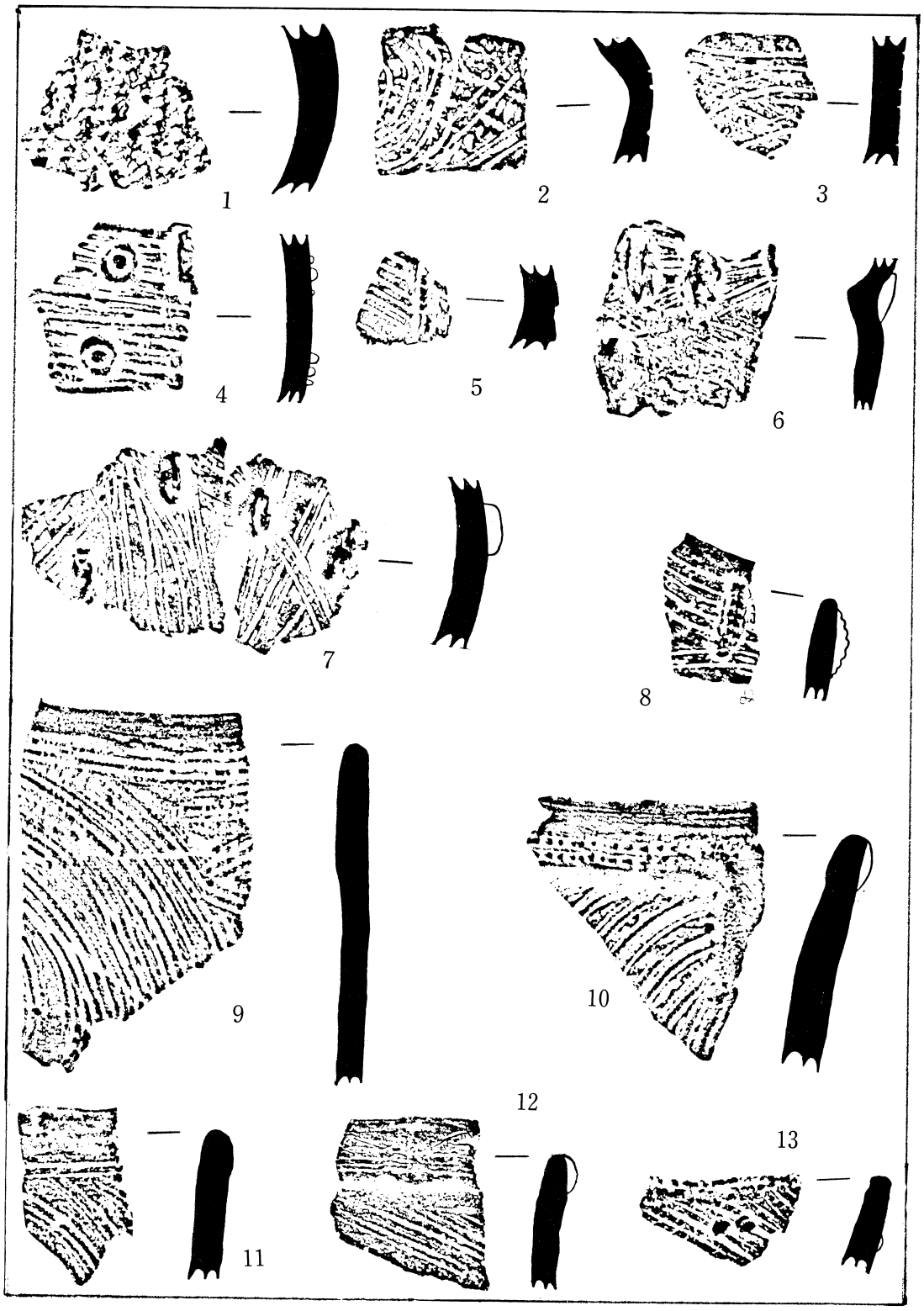
II 磨製石斧

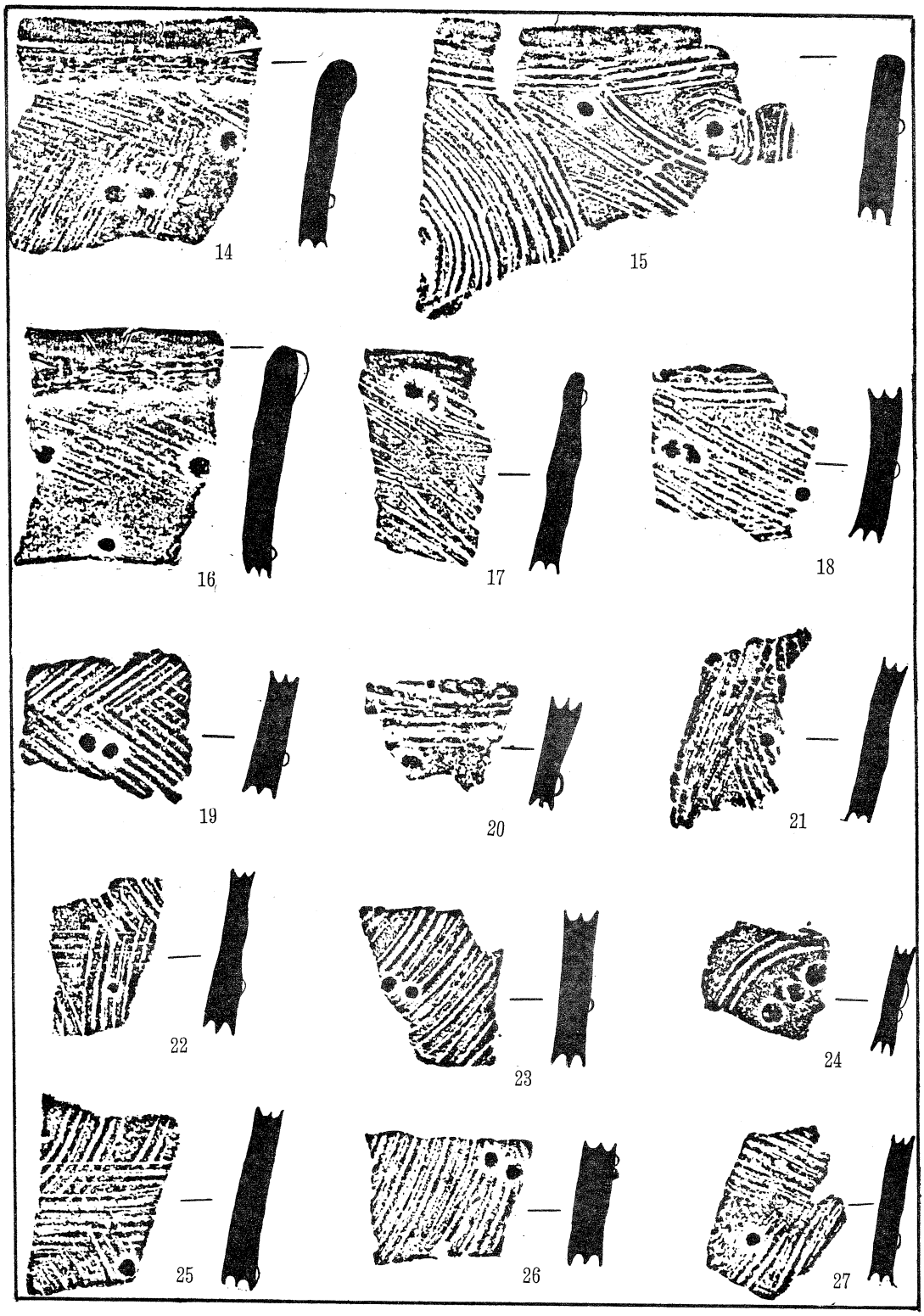
4 の1個であり、これもかなり欠損している。石質は粘板岩でよく研磨されており、光択がある。

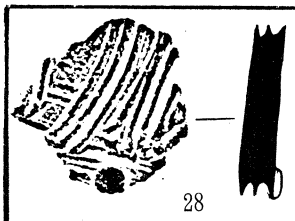
III 石　　匙

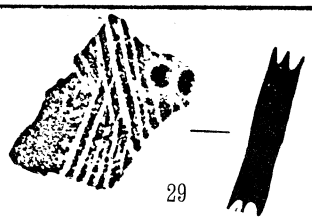
これも1個出土しただけである。背面は母岩から取った際の剝離面を利用し、表面の内部はかなり細かい加工をほどこしている。

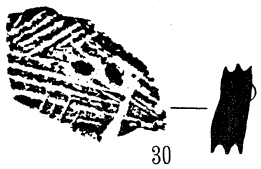
石質は砂岩である。尚石質については都留文科大学篠原　博教授の御教示による。

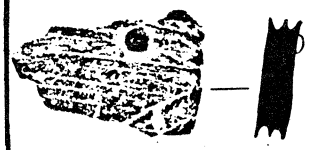

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13


14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27


28

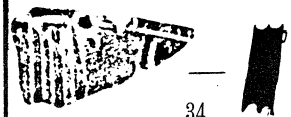

29

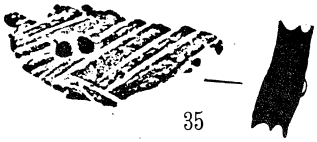

30

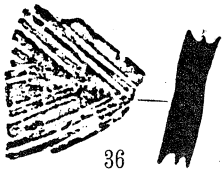

31

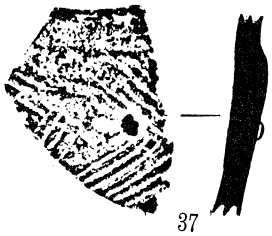
32

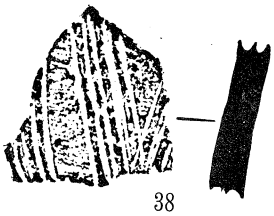
33


34


35


36


37


38

39

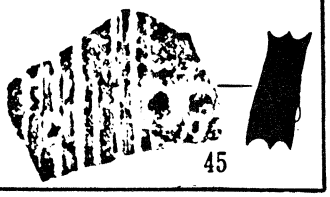
40

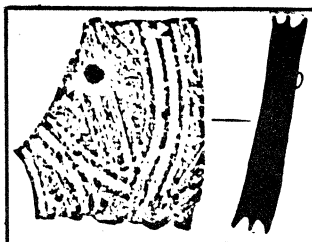
41

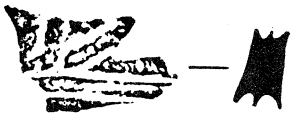
42

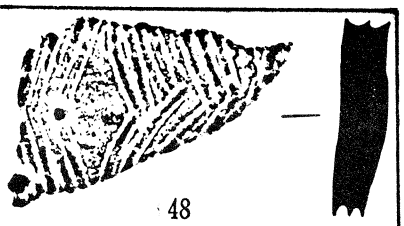
43

44

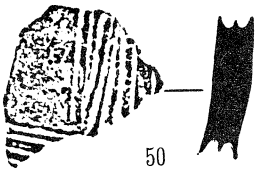

45

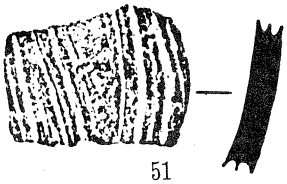

46


47

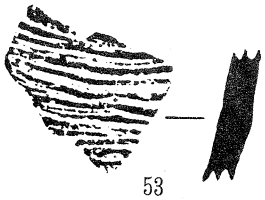

48

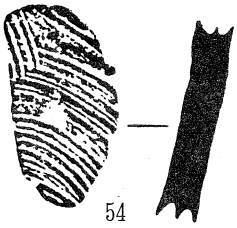
49

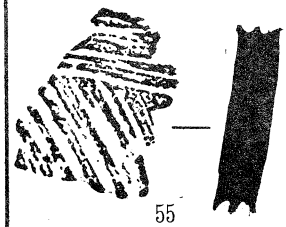

50


51

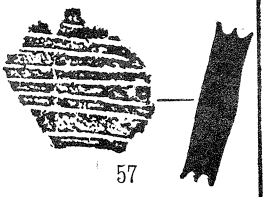
52

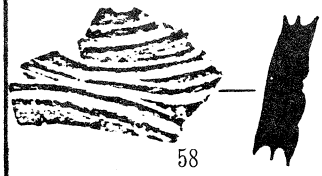

53

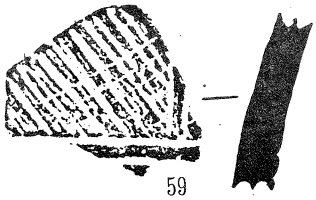

54

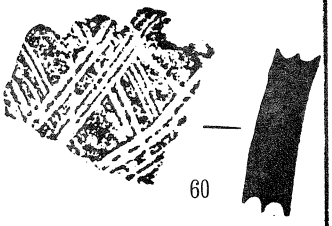

55

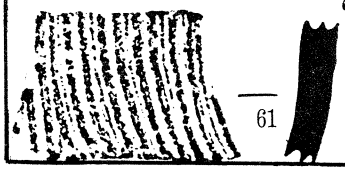
56

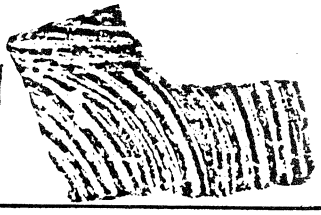

57

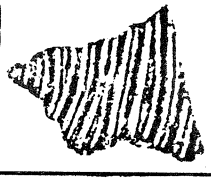

58

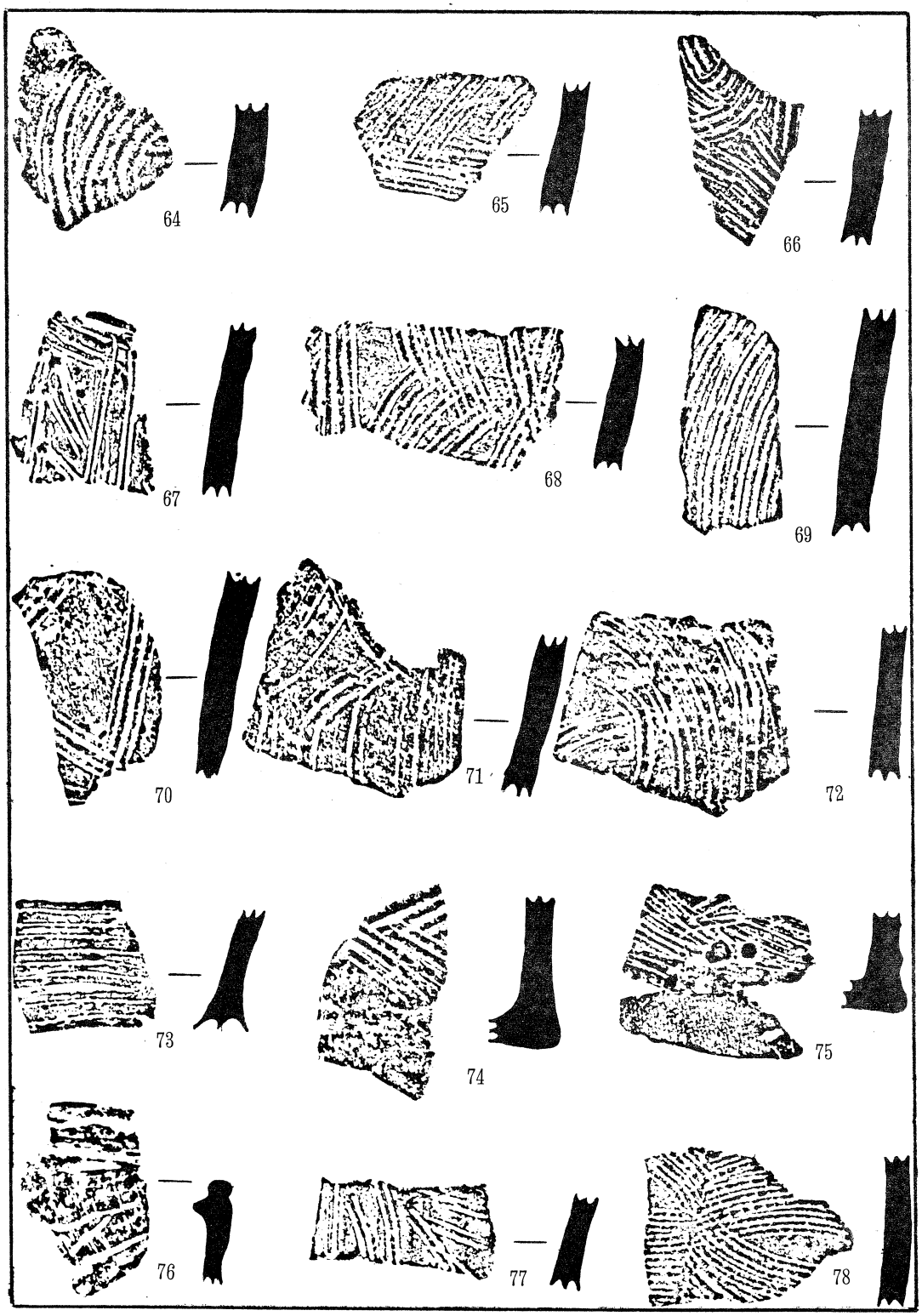

59

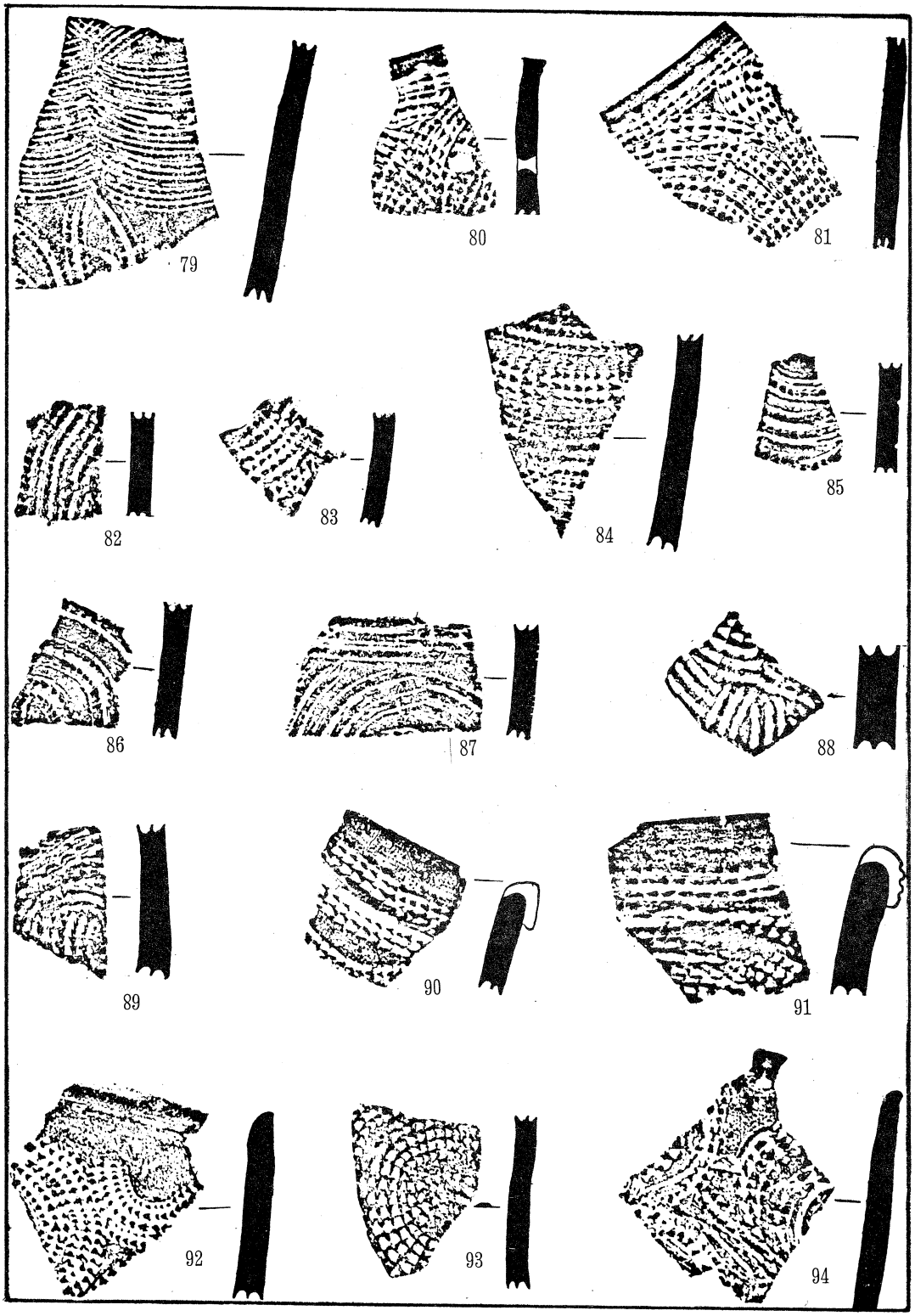

60

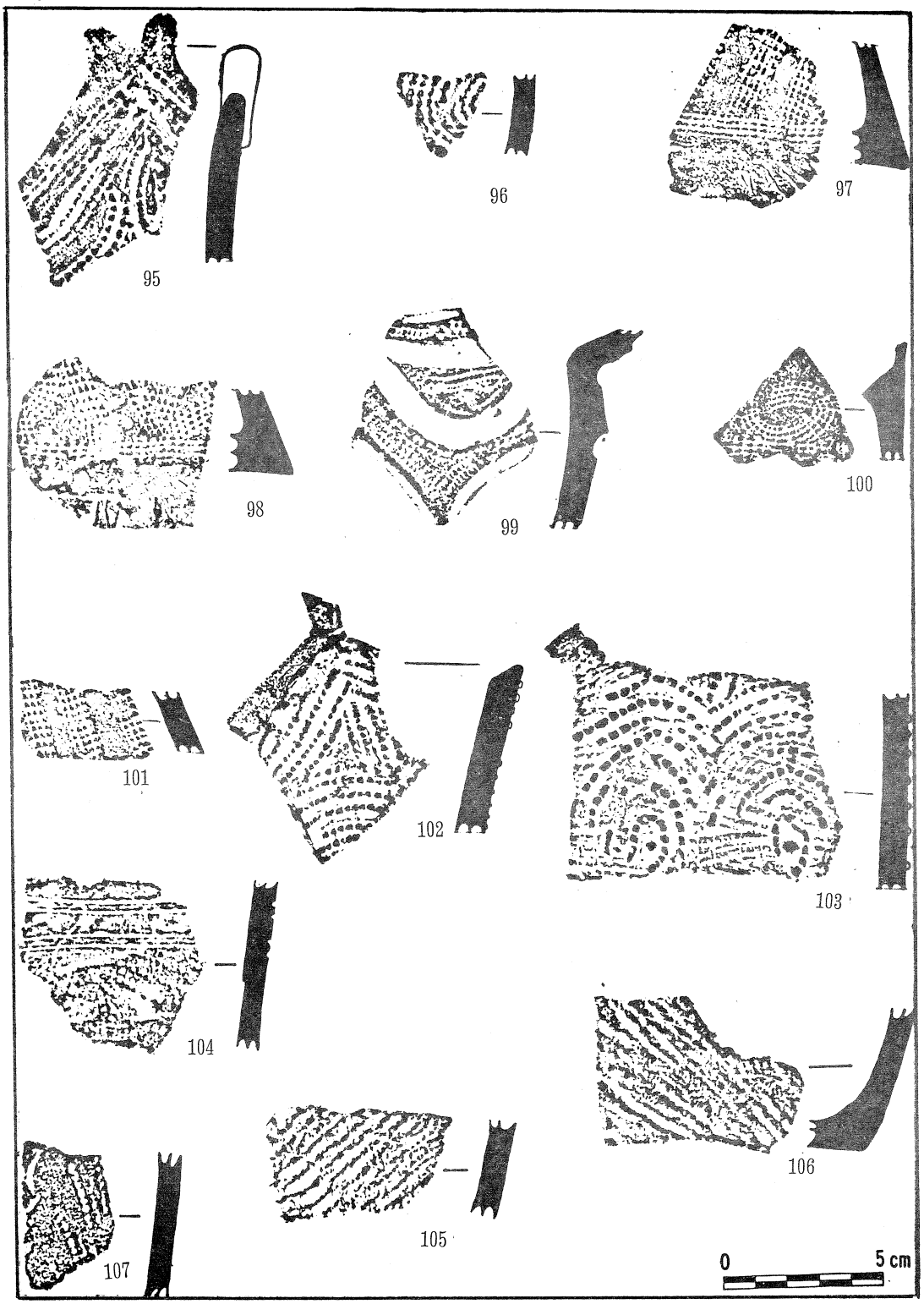

61

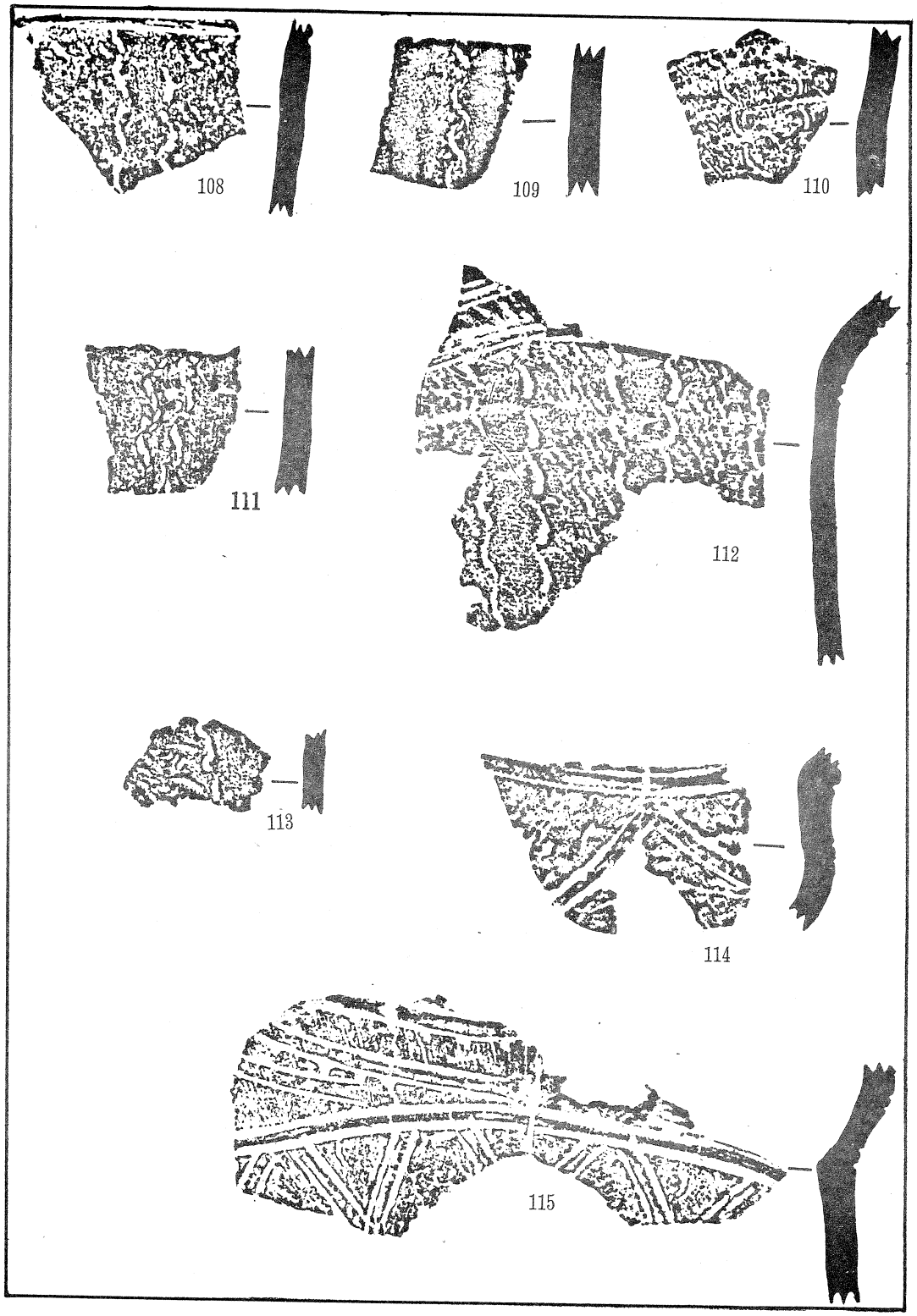

62

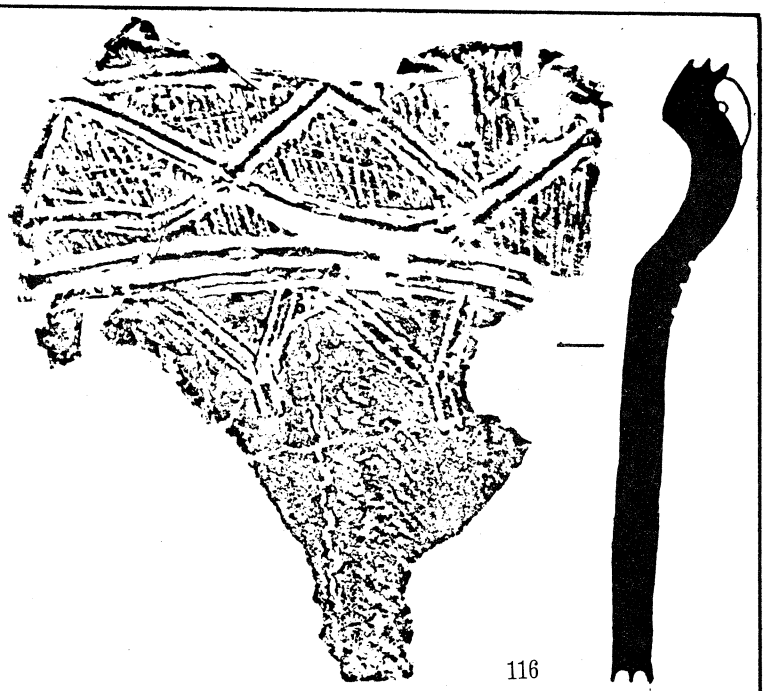

63


64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78


79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94

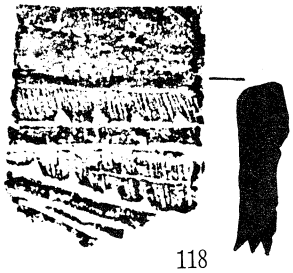

95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
0
5 cm


108
109
110
111
112
113
114
115

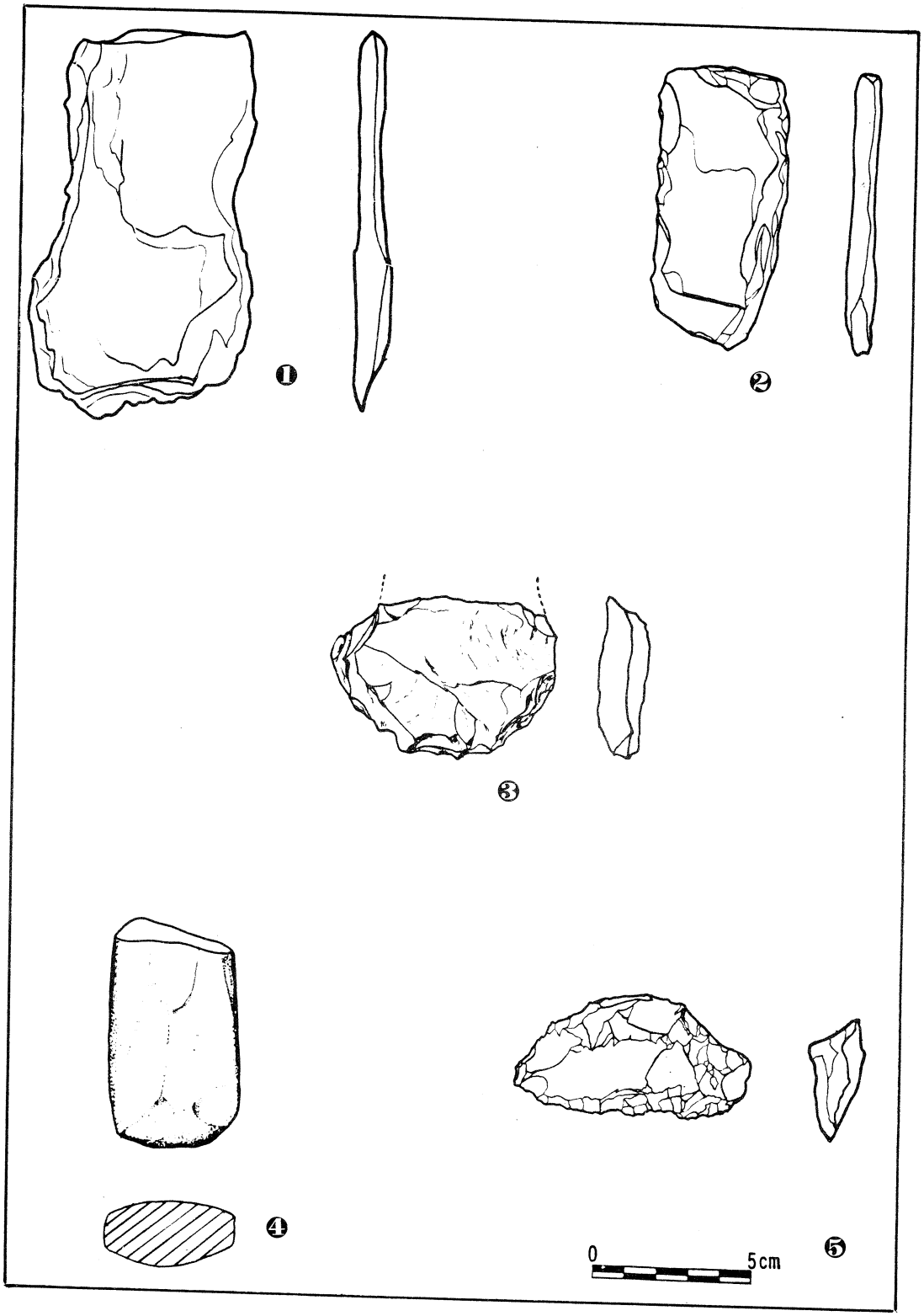


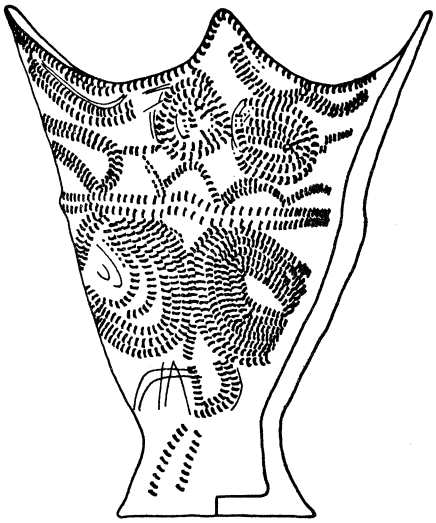
116

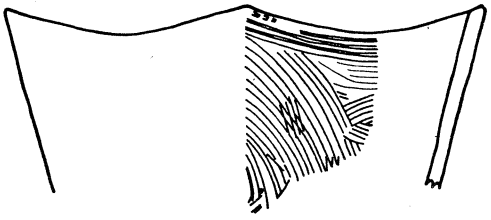
117

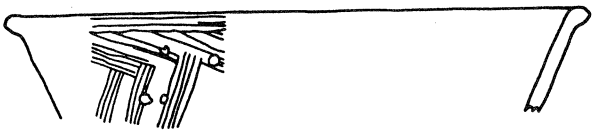


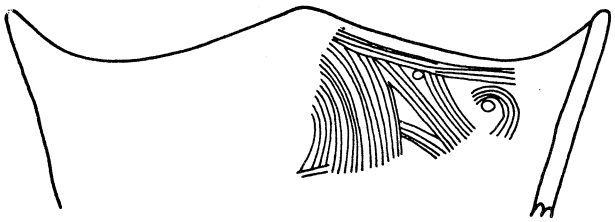
118

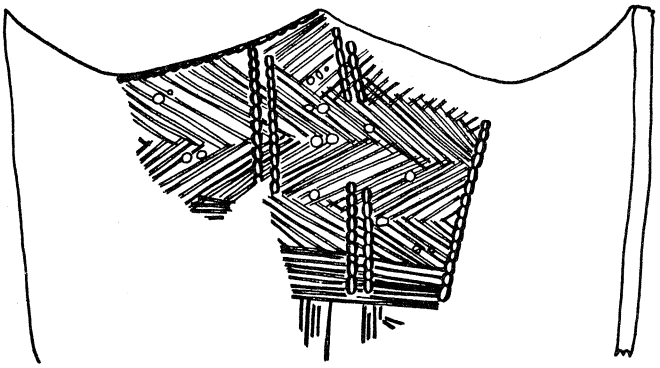

❶
❷
❸
❹
❺
0
5cm

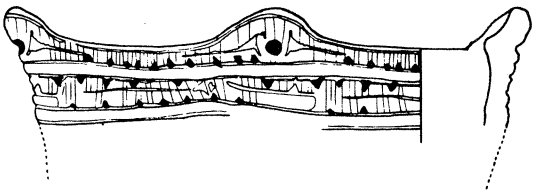












0
15CM

6. まとめ

馬々舟遺跡の発掘調査は昭和50年3月24日から3月30日まで、1週間行なわれた。今回の発掘調査では遺構は発見されなかったが、出土遺物の面では興味深いものが多くあった。

出土遺物の大半は磯磯C式土器に比定されるものであるが、本報告書で第三類土器とした一郡の土器は、都留市では今日まで空白とされていた時期のものであり、山梨県に於てもあまり数多く報告されていないものである。

十三菩提、五領ケ台式土器に比定される土器であるが、八ケ岳、諏訪湖周辺では籠畑、晴ケ峰、梨久保式土器に相当する。

これらの土器が中部山岳地帯と関東との文化の影響をどのように受け、また、どのような関連性を持っているかを今後研究して行かなければならないであろう。

参考文献

日本石器時代人民遺物発見地名表
東京帝国大学　昭3

森本圭一　富士火山砂礫層と遺物
甲斐考古10－1　昭37

藤森栄一　中部高地の中期初頭縄文式土器
富士国立公園博物館研究報告終刊号　昭41

武藤雄六　長野県富士見町籠畑遺跡の調査
考古学集刊第4号第1号昭43

岡谷市教育委員会　扇平遺跡　昭49

長野県教育委員会　上原　昭32

武蔵野美術大学考古学研究会　宮の原貝塚　昭47

秋川市教育委員会　秋川市二宮神社境内の遺跡　昭49

山本正則　都留市田野倉出土の縄文式土器
甲斐考古31号　昭50

7. 調査会の構成

馬々舟遺跡調査名簿（[redacted]

顧問	都留市長	富山節三
名誉会長	都留市教育委員教育委員長	高部通正
〃	都留市教育委員会教育長	定月金太郎
会長	都留市文化財審議会長	羽田富士男
副会長	都留文科大学教授	篠原博
〃	馬々舟遺跡調査団長	山本寿々雄
理事	都留市文化財審議会委員	小俣次郎
	〃	河口智慮
	〃	渡辺長重
	〃	内藤恭義
	〃	兼松昇
	〃	奥隆行
	〃	中村光太郎
	〃	杉本棋明
	〃	窪田薫
	都留市教育委員会教育委員	杉田章
	〃	高橋栄市郎
	〃	大戸一誠

馬場舟遺跡発掘参加者

田村正和・梅山朋子
岡田由起子・斉藤敦子
川口敏克・五十嵐晴子
高坂裕子・勝俣弥生
鈴木真理・向山みどり
渡辺淳子・杉本知子
田村素子

馬々舟遺跡

昭和51年9月25日印刷
昭和51年9月30日発行

発行者　都留市教育委員会

印刷　佐野印刷
山梨県都留市下谷

書名ふりがな　ばばふねいせき
書　名　馬々舟遺跡
副書名
巻　次
シリーズ名　都留市埋蔵文化財調査報告（都留市発掘調査報告書）
シリーズ番号　4
編著者名　奥　隆行ほか

編集機関　都留市教育委員会
発行機関　都留市教育委員会
発行年月日　19760930
作成法人 ID
郵便番号　402-0053　　電話番号　0554-45-8008
住　所　山梨県都留市上谷 1-1-1
遺跡名ふりがな　ばばふねいせき
遺跡名　馬々舟遺跡
所在地ふりがな　やまなしけんつるしとおかいちばあざばばふね
遺跡所在地　山梨県都留市十日市場字馬々舟
市町村コード　19204　　遺跡番号　2040076
北　緯　353235
東　経　1385316
調査期間　19750324-19750330
調査面積　144 ㎡
調査原因　農道工事
主な時代　縄文
遺跡概要　縄文-土器

特記事項